

聖書: 第一列王記22章24～40節

説教: 自分の家に無事に帰らせよ

はじめに

イスラエルの王であったアハブは、敵であるアラムと戦うことを思い立ち、それに先だって四百人の預言者を呼んで、戦いに出て行くべきか否かを尋ねます。そうすると全員が声を合わせて「主は王さまの手に勝利を与えてくださる」と答えました。これをわきで聞いていたのが、一緒に戦おうとしていたダの王ヨシャファテです。彼は信仰者でしたので、「ここには主の預言者はいないのですか」と尋ねると、アハブは預言者ミカヤをしぶしぶ呼ぶことにします。そこでミカヤは、イスラエル王はこの戦いで倒れて死ぬと告げ、そのために神は四百人の預言者に偽りの霊を授けてアハブが戦いに出ていくように仕向けたのだと、神のご計画までも明らかにしたのでした。

それが前回までのあらすじです。今日の所では、ミカヤの預言どおりにアハブは戦いで倒れていきます。ここにどのような神のみこころが記されているのか。そのことを見ていきます。

1 預言者ミカヤ

四百人の預言者のなかの一人であったゼデキヤは、ミカヤが語ることばに腹を立て、いきなりミカヤの頬を殴りつけ、「どのようにして、主の霊が私を離れ、おまえに語ったのか」と言います。というのは、彼はわざわざ王のために鉄の角を作り、「この角で敵を突いて断ち滅ぼすのです」と、王さまが喜ぶようなことを語っていたのでミカヤのことがよほど腹に据えかねたようです。

ミカヤの災難はこれだけではない。彼はアハブの怒らせたため牢に投げ込まれ、わずかなパンと水しか与えられません。正しいことを語ったのにこんな目に遭うのですから預言者という仕事は全く理不尽です。でも主に召された者は、たとえ殺されることになったとしてもまっすぐに語らなければならない。それが預言者の役割でした。

2 イスラエル王

1) 矢が貫く

アラムに向かって戦いに出て行くべきか否か。そのような大事な会議で、アハブは適切に判断したのでしょうか。人というのは自分が望んでいるものを選びようとする傾向があります。例えば、健康診断で「精密検査をしてください」と言われても、「な

に、大したことはない」と考えるようなものでしょうか。結局、イスラエル王はミカヤの警告を無視し、四百人の預言者たちが語る心地よいことばを選び取り出陣します。しかしアハブの心に引っかかるものがあつたようです。「もしかしてミカヤの預言のとおりになるかも知れない。」そこでどうしたか。30節。「イスラエルの王はヨシャファテに言った。『私は変装して戦いに行きます。しかし、あなたは自分の王服を着ていてください。』イスラエルの王は変装して戦いに行った。」

実際、敵が王の服を着ていたユダの王ヨシャファテをイスラエルの王と間違えてしまう。敵に追いつめられたヨシャファテが助けを求めて声を上げたので、それを聞いた敵の戦車隊長がこの時初めて相手を間違つたと気がついて引き上げます。これを見たときアハブは、自分の考え出した変装作戦がまんまと図に当たつたと喜んでことでしょう。四百人の預言者たちとミカヤとどちらが本当のことを語つたのか、これで結論が出た。ミカヤはこう語っていたのです。28節。「もしも、あなたが無事に戻って来ることがあるなら、主は私によって語られなかったということです。」自分は無事に生きています。ミカヤは、主が語っているなどと散々脅かしたけれど、神がどうしたというのか。結局、すぐれた知恵を持つ者だけが勝利者となるのだと自分を誇ります。

2) 主が語られたとおりに (21章19節)

しかしアハブの知恵はそこまででした。34節。「そのとき、ある一人の兵士が何気なく弓を引くと、イスラエルの王の胸当てと草摺(くさずり)の間を射抜いた。王は自分の戦車の御者に言った。『手綱を返して、私を陣営から出させてくれ。傷を負ってしまったから。』」

こうしてイスラエル王は戦車の中で血を流しながら息絶えていきます。そのときの様子が38節にあります。「それから戦車をサマリアの池で洗つた。犬が彼の血をなめ、遊女たちがそこで身を洗つた。主が語られたことばのとおりであつた。」

主が語られたことばとは、21章19節のことを指します。アハブが自分の家の隣にあつたぶどう畑を手に入れるために、信仰者ナボテにあらぬ罪をかぶせて無理矢理有罪とし、石打ちの刑で殺してしまっています。そのように正義を曲げて欲しいものを手に

入れたことに対し、主は預言者エリヤにこう告げたのです。「彼にこう言え。『主はこう言われる。あなたは人殺しをしたうえに、奪い取ったのか。』また、彼に言え。『主はこう言われる。犬たちがナボテの血をなめた、その場所で、その犬たちがあなたの血をなめる。』」

3) 主のみわざ

草摺というのは、腰から下を覆っている鎧のことです。何気なく引いた弓がイスラエル王に当たることさえ、非常に小さな確率ですが、その弓がちょうど胸当てと草摺の間を通過してアハブのからだを射貫くのはあり得ないほどの確率に見えます。でもヘブル人への手紙4章12節のみことばのとおりなのです。「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」

まさに神は、イスラエル王アハブの心にある思いやはかりごとを見分けて、わずかに数ミリしかない隙間を矢が刺し貫いていく。このようにして主が語りになったとおりにイスラエル王がさばかれていきました。

3 神

1) 自分の家に無事に帰らせよ

なぜイスラエル王に対して神はこのような厳しい態度をとるのでしょう。実は、ここにあるもう一つのテーマと関係しますので、まずそのことから取り上げます。そのテーマとは何か。36節です。

「日没のころ、陣営の中に『それぞれ自分の町、自分の国へ帰れ』という叫び声が伝わった。」

イスラエル王が倒れたのもうこれ以上戦うことができない。日も暮れたので家に帰ろう、という話なのかと何気なく読み飛ばしてしまいそうです。しかし、預言者ミカヤが語っていたことばに注目しなければなりません。17節。「私は全イスラエルが山々に散らされているのを見た。まるで、羊飼いのいない羊の群れのように。そのとき主はこう言われた。『彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ。』」

日本がかつて戦争をして負けたとき、中国大陸や東南アジアの国々に残された兵士や家族たちは日本に帰るために大変な苦勞をしたと聞いています。敗戦によって人々を無事に帰国させるような力が日本にはほとんどなかったのも、自力で帰るしかありません。途中で病氣や飢えのためにいのちを落とした方もたくさんいたそうです。小さな子ど

もを連れて帰ることができず、中国に残して来なければならなかった方もいました。戦争が終わったからよかったねとはならないのです。実は、戦いが終わっても大きな問題が残ったままになっている。

主はこのときどこをご覧になっていたのでしょうか。「彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ。」イスラエル王アハブをさばいたのでそれで終わり、ではありません。その後のこと、羊飼いのいない羊の群れとなってしまう彼らが無事に家に帰ることができるのかどうか。イスラエルの王をさばく前から、すでにそのことを心配しています。

2) 深くあわれむイエス (マルコ6章34節)

このことはイエスご自身の姿にも見ることができます。マルコの福音書6章34節です。「イエスは舟から上がって、大勢の群衆をご覧になった。彼らが羊飼いのいない羊の群れのようにであったので、イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。」

この後、日が暮れて家に人々が帰ることが難しくなったとき、イエスは男だけで五千人の人々にパンを裂いて分け与えたという記事が続きます。

自分のことを羊飼いのいないあわれな羊であると思う人はほとんどいません。むしろ自分の人生は自分の力で切り開くのだ、自分自身が自分の人生の主人公なのだと考えます。ところが神は、そのような生き方をしている私たちをご覧になって、主ご自身がまるではらわたがちぎれるくらいに悲しみ、あわれんでくださる。それほど深刻な状態に置かれているのです。

いったい何が深刻なのでしょう。主は言われます。「彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ。」このことばは、私たちに二つの問題があることを示唆しています。一つ目は、私たちには主人がいないということ。二つ目は、私たちは自分の力では自分の家に帰ることができない。この二つの何が問題なのか、と多くの方は不思議に思うかもしれません。

3) いのちを与えるイスラエル王

でも「自分の家」とはどこのことでしょうか。私たちの帰るべき故郷のことだとしたらどうでしょうか。私たちは結局どこに帰るのでしょうか。死んだらどこに行くのでしょうか。何もなくなってしまうのでしょうか。あるいは幽霊のように漂うのでしょうか。あるいは虫か何かになるのか。いろいろ言われていますが、はっきりしない。多く

の人は帰るところを知りません。それなのにどうして生きていけるのか。私は小さな時からそのことが疑問で、非常に悩んできました。

でももし、帰るべきところが約束されているならばどうでしょう。たとえ目の前に深刻な問題が起きて、たとえ大きな病気になろうとも揺るがされない。私たちは帰るべき故郷である天の御国迎えられる。そのような約束がある。それがクリスチャンです。

もちろん人の力で行けるところではありません。主人がいなければ行くことができない。羊飼いに導いていただかなければ行けない。そのような場所です。誰が羊飼いなのでしょうか。もちろん主イエス・キリストです。どのような羊飼いでしょう。

先ほど、神はなぜイスラエル王に対してかくも厳しい態度をとるのか、そのことをわきに置いたままでした。イスラエル王は羊飼いなのです。羊を守らなければならない義務がある。ところが、アハブは私利私欲のためにナボテのいのちを奪い、羊を殺した。イスラエル王としての義務を果たすどころか、その反対のことをした。だから彼は厳しくさばかれたのです。

でも真のイスラエル王として来られた方は違います。羊にいのちを与えるために十字架でさばかれ、ご自分のいのちをお捨てになり、王としての務めを完全に果たしてくださいました。そのようにして、私たちが天の故郷に無事に帰ることができるように道を備えてくださったのです。

主を信じなさいと言われます。この方を私の羊飼いと受け入れなさいと言われます。それは主人と奴隷の関係ではありません。この方が主であるからこそ、私たちは安心できる。本当のいのちを喜んで生きていける。

私たちが約束の故郷に無事に帰ることができるように、主は日々心を砕き、導いてくださいます。